

真実回顧録

クルトン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはとある探索者の話である。

小さな探偵事務所を営む平凡な探偵の相川真実がある依頼をきっかけにこの世の真実に触れていく。

残酷な現実に抗う無力な探偵の物語。

※この物語はクトゥルフ神話TRPGの脳内シナリオを基にされています。

目

次

プロローグ
第一話
第二話

9 3 1

プロローグ

久し振りに筆を取つて文字を綴る。

何から書けば良いのか、書きたい事が多過ぎて何から手を付けたら良いのか分からなくなる。

普段はパソコンでキーボードを叩いていたせいで何だか妙な違和感を覚える。わざわざ手書きにする必要もないだろうにと思つたが、こういつた事は何事も形から入るべきだ。

何はどうもあれまでは挨拶から始めるべきだろう。

読者の皆様、初めまして。

僕の名前は相川真実（あいかわまこと）、何処にでもいる探偵だ。いや、探偵は何処にでもはないか。とにかく僕は神鳴沢市（かなざわし）に小さな探偵事務所を営んでいる。

どうして探偵なんかになつたかと云うと、単に名探偵に憧れていたのだ。

小説に出てくるような彼らのように推理して格好良く事件を解決する。そんな風になりたくて、探偵をやつている。しかし、現実というものは中々に厳しかった。

僕が探偵になると伝えた両親は、大学まで行かせてやつたのに何を考えているんだ現実はそんな甘くないぞと呆れ返り、縁を切られた。元々そこまで仲は良くなかったが実の親に絶縁を言い渡されるのはショックだった。

実際両親の云う通り、現実は甘くなく、事務所を開いたは良いものの舞い込む仕事は浮氣調査や猫探しなどで僕が求めていた難解なトリックで引き起こされる殺人事件や事件を裏で操る巨大な黒幕なんてものはなかつた。

そんな訳で憧れも薄れ、惰性的に日々を過ごして早3年。

世知辛い毎日を噛み締めていると、数少ない友人から結婚式への招待状が届いたりする日には自分の行く末に焦燥する夜もある。その内依頼も来なくなつて小さな探偵事務所でひつそりと孤独に死んでいくのではないかと考える時もあるが、幸いなことに僕にはお節介な

友人がいた。

その友人はよく事務所に来ては僕の様子を確認してくれる。

大学からの付き合いだが馬が合つて卒業後も関係は続いている。よく僕の依頼を手伝ってくれたりする奴で、助手みたいな存在だ。

彼女がいれば僕が孤独死する心配もなさそうだ。

さて、前置きはこの辺でいいか。

僕がこんなものを書こうと思い立ったのには理由がある。

忘れもしない夏の夜、僕は怪異に遭遇した。それが全ての始まりだった。

この物語を語るに当たつて欠かせない少女のこと、あの宵闇の中で唯一輝く美しい金髪の少女のこと。

この物語が照らし出すのは、この世界の闇。この日常の影に潜む者達の話だ。

皆様には知つてもらいたいと思い、僕が目撃した真実を語ろう。

では、ご覧頂こう。真夏に起きたあの事件の真実を。

第一話

夏も真っ盛りとなつたある日のこと。

小さな探偵事務所で一人の男がよく片付けられた机の上で頭を抱えていた。

「……仕事が来ない」

ここは相川探偵事務所。町の中央に位置する大図書館以外にめぼしいものがない神鳴沢市にある探偵事務所だ。

所長である僕こと相川真実は、1ヶ月程度閑古鳥が鳴き続いている事務所で呻いていた。半ば勢いで探偵事務所を開いて早3年。チラシを配つたりホームページを開いたりして宣伝し続けてきたおかげでついこの間までは仕事に困らなかつたのだが、遂に仕事が来なくなつた。

僕が行つていた仕事と言えば浮氣調査に猫探し、たまに空き巣を捕まえたりしたものだが、元々こういうのは口コミで広がっていくものだ。たとえ僕に難事件を紐解く灰色の脳細胞があろうとも、それを披露する機会がなければ宝の持ち腐れである。

別に僕は事件を求めいる訳ではない。事件なんてものは起こらないに越した事はない。それこそ殺人事件なんてものを求めるだなんて間違いである。そりや殺人事件を解決したなんて事になつたら僕は有名になれるだろうが、そんなのを求めるのは一般的な人生を歩んできた者から言わせれば背徳的だ。

だから問題は依頼の有無ではなく、金だ。

元々事務所を開いた時点で殆ど貯金はなく、依頼の報酬もそれを達成する上の道具やら生活費やら事務所の改装費で大して残つていな。ついには昨日、夏の必需品であるエアコンが寿命を迎えてしまつたことである。

食費だけなら僕の贅肉を削ぎ落とせば何とかなるかも知れないが、この蒸せ返るような猛暑の中をエアコン無しで過ごすというのは才アシスのない砂漠に放り出されるようなものだ。

だからこうして汗を垂れ流しながら悩んでいるのだつた。

「暑い……、とりあえずコンビニで涼んで来よう」

そう思い、事務所を出ようとするとノックの音が響いた。

先程まで閑散としていたせいで反応が遅れてしまう。

少し慌てて身だしなみを整える。最近は暇だつたせいで掃除ぐら

いしかやることなかつたおかげで事務所は片付いていた。

適当に準備を終え、来客に中に入るよう促す。

中に入つて来たのは、意外でも何でもない人物だった。

「やあ、元気そうで何よりだよ」

「ああ、これが元気そうに見えるなら君は医者を辞めた方がいい」

「生きているなら元気だよ。1ヶ月ぶりくらいかな、仕事の方はどうだい？」

「1ヶ月前から閑古鳥が住み着いたよ」

「それは、大丈夫なのかい？ていうかここ暑いね。節電中？」

「残念ながらうちのエアコンは辞職した」

「それはまあご愁傷様で」

彼女は宇佐美蓮（うさみれん）。僕の友人だ。

僕が通つていた大学で知り合い、馬が合つて今まで関係が続いてい

る。僕は心理学部で、彼女は医学部である。

蓮は僕が大学を卒業した後、大学院に進んで、順調に医者の道を進

んでいる。

彼女はよくこの事務所に僕の様子を見に来たり、依頼の手伝いをしてくれる助手のような存在だ。しかし、20代の女性が色事に現を抜かさず目標に向かつて努力しているのは感心するが、少し女としてのこれからに心配してたりする。決して僕も人の事は言えないが、男と違つて女が未婚のまま終わるのはどうなのかと心配になる。

整つた顔立ちをしているから言い寄つてくる輩もいるだろう。彼女の口から聞かないから恋人はいないとは思うが、実際の所どうなんだろう。

とりあえず、蓮が来たことでまだ事務所に留まることにした。

冷たい麦茶を二つ淹れて、来客用のソファに座る。

「……1ヶ月顔を見なかつたけど、何かあつたのか？」

「単に仕事が忙しかつただけだよ。ようやく落ち着いたから会いに来たんだ」

「そうか。まあ順調そうで何よりだよ」

「それより仕事がないって大丈夫なのかい？ここで来るかどうかも分からぬ依頼人を待つより何か行動を起こした方が良いんじゃないのかな」

そう心配してくれる蓮。

彼女が僕にお節介を焼くのはいつもの事だが、夏休みに宿題もせずにゲームをしている学生に説教する母親のように言われると少し癪に触る。

「今すぐにでも依頼人はやつて来るさ。ホームページの更新ぐらいはやつてるし急いても事は好転しないよ。それにここで待っていたおかげで君と会う事も出来たしね」

「うつ……、ま、まあ確かに……」

そう言い返されると、蓮は少し顔を赤くして納得した。

彼女はこうやつて素直に好意を伝えられるのに弱い。してやつたりと内心思いながら、僕も言うのが恥ずかしかったので麦茶を啜つて顔の熱を冷ました。

「そういうえば君に聞いて欲しい話があつたんだ」

落ち着いた蓮が微妙な沈黙を破つた。

もう少し弄つてやろうかと思つたが傷を負うのは僕もなので黙つて話を聞くことに決めた。

「何の話だ？」

「実は先週、アメリカのアーカムにあるミスカトニック大学から一人の教授が来たんだ」

「アメリカからどうして日本の大学に？」

「何やら隣町の美術館で出展される作品を見に来たらしい。その人はパトリック・ハーンというんだが、考古学で色々と有名らしい。私は考古学は門外漢だから詳しくは知らないけどね」

「ふうん。それで僕に何を聞かせたいんだ？」

聞き覚えのない名前の連続に、つい話を急かす。

「ああ、これは教授がゲストとして講義に出席した時の話なんだが、教授が話し始めてすぐに彼は倒れたんだ。その後教授は病院へ運ばれていた」

「？」

「まあ聞いてよ。教授は病院に運ばれてすぐに意識を回復したんだけど、目覚めてからは自分の事をあまり覚えていなかつたようでね。身体にも精神にも特に異常はなかつたらしい。しかし、教授はすぐに病院を出ようとしたりと、何かを探しているらしいんだ」

黙つて聞いていても何を言いたいのか分からず疑問符を浮かべている僕を無視して蓮は話を続けた。

「私は妙に気になつて教授が言つていた、美術館のこと調べてみたんだ。そしたら賢者の石という作品が明日、出展されるらしい。私はこの賢者の石が教授がおかしくなつた原因だと思ってるんだよ」

賢者の石というよくゲームやアニメなんかで出てくるアイテムの名前を聞いたと思えば、僕の友人は訳の分からぬ憶測を言い始めた。

「何の話かと思えば、君の趣味の話か」

「冷たい反応だね。男の子なら賢者の石なんて心躍る名前じゃないかい？」

「僕に童心に返る趣味はないし、そういうのはもう卒業したよ」「名探偵に憧れている癖によく言うよ」

「痛いところを突いてくる彼女に僕はそれ以上言い返すことは出来なかつた。

蓮には都市伝説だと未解決事件だとオカルトめいた妄想を繰り広げる癖がある。大学の頃から知つていたが、事あるごとに僕はそんな妄想を聞かされていた。彼女は中々行動的で、廃墟や心霊スポットに連れ出されることもしばしばあつた。

「私が賢者の石に原因があると考えたのはきちんとした理由があつて……」

彼女の言葉を遮ったのは部屋に響いたノックの音だつた。

本日二度目の来客の訪問に、僕は蓮の話を後回しにして玄関へと向

かつた。

来客は40代後半くらいの女性だつた。

それなりに高価そうな服装をしていたが、女性の雰囲気から主婦ではないだろうなと感じた。

女性を中心に案内して、来客用のソファへと座らせる。蓮の気遣いでコップは既に片付けられていて、先程まで談笑していたとは思わなれないだろう。

「では、改めまして。私は相川真実と申します。相川探偵事務所の所長です」

「これはご丁寧に有難う。私は加賀美桜と申します。そちらの方は？」

加賀美桜と名乗った女性は新しく淹れた麦茶を二つ持つてきた蓮の事を聞いてきた。

「私は助手の宇佐美と申します」

来客用のティーカップを机に置いてから蓮は冷静に返答した。

今まで何度も助手役をしてもらっていたから慣れた様子だ。優秀な彼女がこのまま助手をしてくれれば事務所はきっと繁盛するだろうなど思つた。

「早速ですが今回はどういった用件で？」

「ええ、実は1週間前から私の娘が行方不明でして、貴方達に探して頂きたいんです」

「人探しですか。娘さんの名前や年齢などを教えて頂いても構いませんか？」

「はい。娘は瑠美と言います。年齢は今年で14で、学校には通つていません」

「え？ それは病を患つてているといったような理由でしようか？」

「いえ、学校に通わせる必要がないので。勉強は家でやらせています」

それは過保護過ぎるだろうと思つたが他人の家庭事情に口を出すのは気を悪くされそうだったので止めておいた。

それから話を続けたが、大した情報を得られなかつた。後は娘の写真を受け取り、契約書にサインしてもらつたり報酬の相談をしてから

加賀美は事務所を跡にした。

「さて、久し振りの依頼だ。僕はこつちを優先させてもらうが、君はどうする？」

「話の続きを言いたい所だつたけど、仕事の邪魔をする訳にはいかないね。手伝いたい所だけど、私も仕事があるから、残念だけど今回は遠慮させて貰おうかな」

「いや、構わないよ。君にはいつも助けて貰ってるからね。依頼が終わつたら話の続きを聞かせてくれ」

「うん。じゃあまた連絡するね」

蓮はそう言つて事務所を出て行く。

久し振りの依頼だが助手なしでも達成してみせれば彼女を安心させられるだろうか。

時間を見ればもう17時だつた。晩飯がてら聞き込みでもしてみようかな。

書類を整理してから、外出の準備をする。

1ヶ月振りの依頼に色々と思考を巡らせる。少女は一体何処へ行つたのか、少女は自ら失踪したのか、もしくは何者かに誘拐されたのか。

事件に直面するとそれしか考えられなくなる。考え方を止めることがなく足早に事務所を出る。しかし……

「……加賀美桜か、娘のことをあまり心配しているようには見えなかつたが、何か理由があるのかも知れないな」

第二話

晩飯を適当に食べて、聞き込みを始めた。

しかし、時間も時間だからかあまり街に人の姿は少なかつた。

「……そうですか。ご協力有難うございました」

帰宅中のサラリーマンや主婦達に声を掛けてみるが、有力な情報を得られなかつたので諦めて帰路に着こうとする。

そこで、警察署で聞き込みをしようと思い付いたので早速向かつた。

「申し訳御座いませんが、捜査情報は開かせない決まりになつておりますので……」

受付の女性は僕に業務的に断りを入れて來た。

分かつていた事だが、捜査情報なんて一介の探偵に開かせられることはない。

もう少し融通を効かせてくれてもいいだろうと内心思いながらも、こんな所で騒ぎ立てるなど見つとも無い真似は出来ないので渋々帰ろうとする。

「おっ、そこに居るのは相川君じゃないか」

「ん、足立さんか。今上がりですか？」

「いやいやあ、今日も残業だよ。君こそ警察署に何の用だい？」

帰ろうとした僕を呼び止めたのは神鳴沢署の刑事、足立徹。

僕が空き巣を捕まえた時に知り合つた刑事だ。見て通り軽い男で、前に上司であろう人に怒られていた所を見ると優秀な刑事ではないのだろう。

だが、彼も刑事である以上は少なくとも情報は降りてきているだろう。だから、駄目元で彼にも聞いてみることにした。

「足立さん。今依頼で行方不明者を捜索しているんですが、加賀美瑠美という少女の捜索願つて出されているか分かりませんか？」

「え、加賀美瑠美？いや、残念だけど知らないなあ。調べてみたら分かるかもしれないけど……、捜査情報を一般人に教える訳にはいかないしねえ」

「そこをなんとかお願ひします。警察が忙しいのは分かりますが、少女の発見の為に情報が少しでも欲しいんです」

普段なら引き下がるが、知らない仲ではない彼に無理を言つてみる。

何としても物にしたい依頼もある為、ここは少しでも手掛けりとなる情報が欲しかった。

「ううん……まあ、善良な市民の頼みだし無碍に断る訳にもいかないか。仕方ないなあ、相川君は」

足立は肩を竦めながらも僕の頼みを聞いてくれた。

そんなあっさりと捜査情報を明かして良いのかと思つたが、そうさせたのは他でもない僕があるので要らんことは言わないようになつた。「はい、じゃあまたね。あーこの事はくれぐれも内密にね！」

「ええ、分かっています。有難うございました」

足立から情報を貰つて、警察署を跡にする。外は既に暗くなつており、街灯だけが道を照らす灯りとなつていた。

足立から貰つた情報は僕の推理通りだつた。

加賀美桜は娘の捜索願を出していない。

理由は分からぬが、何か出せない理由でもあつたのだろうか。娘の捜索願を出せない訳とは一体何なんだろう。どちらにしろ加賀美桜に対する謎が深まる。

考え事をしながら事務所へと歩いていると、ソレと目が合つた。

ソレは街灯の灯り奥の暗闇に潜んでいた。

爛々と光る赤い二つの点は、最初車の尾灯の灯りかと錯覚させたが、ゆらゆらと蠢く様子から誤りだと気付かされた。

その妖しい光が照らし出したのは、恐ろしく痩けた犬のような顔だ。そいつは口元から飢えた涎を垂らし、鋭い牙を覗かせていた。体は醜く腐つていて、手足には獲物を狩る為であろう爪が生えていた。まるでグールのような生き物は僕と目を合わせたまま、此方へと近付いてきたのだ。

「ツ！」

本能的に恐怖を感じた僕は一目散に逃げ出した。

逃げ出した直後、あの生物の吠えるような声が聞こえた。

あの生物が僕を狩ろうと追つてきていたのだと直感して、僕は訳も分からず闇の中を疾走した。

気がつくとそこは森の中だつた。

追手を凌ごうと適当な茂みの中に隠れた。

久し振りに全力で走つたせいで激しい動悸を起こしたが、奴に気付かれまいと無理矢理抑えつけた。

頭をフル回転させ、近くに武器になりそうな物はないか探すと、丁度いい木の棒を見つけたので貰つておいた。

こんな棒切れが奴に効くかどうかなど分からなかつたが何かないと恐怖でどうにかなりそうだつた。

今僕は一人で、頼りない棒切れしかない。あのような恐ろしい化物を前に、非力な僕がどうなるかなど火を見るよりも明らかだ。

じつと息を潜めていると、近くからガサガサと音がした。

奴が来る。震えを抑えながら音の場所を見ると、そこから現れたのは黒い少女だつた。

真つ暗な森の奥から現れたのは黒いワンピースを纏つた金髪の少女だつた。

僕の隠れている茂みからは、月光によつて照らされた木々の間に突然少女が現れたように見え、何処か幻想的に思えた。

その少女は何をするでもなく、そこに現れてただ月を眺めていた。

思わず見惚れていた僕は我に返つて、少女に警告しようと茂みから出ようするが、それを邪魔するように少女の来た方向からまた音がした。

次にそこから現れたのは、あの恐ろしいグールだつた。

改めて見て恐怖が蘇り体が硬直する。

あの少女を守らないといけないと思うが、体は言う事を聞いてはくれなかつた。

グールは少女を見つけると新しい獲物との邂逅に喜びを隠す事なく飛びついて行つた。しかし、その瞬間、目の前に闇が現れた。

その闇は球体の霧のようで少女とグールを覆い隠した。

その恐ろしい怪物を前にか弱い少女の行く末を僕から隠すように思えた。

そんな風に傍観していると、闇の中からグールの悲鳴が聞こえた。

悲鳴という表現が正しいのかは分からないが僕にはそれが動物の

痛々しい鳴き声のように感じられた。

グールの悲鳴が何度も聞こえ、聞こえる度に小さくなつていく声が遂には聞こえなくなると闇が霧散した。

闇が晴れたその場所には身体中に痛々しい傷痕を残した血塗れのグールとそのグールの腕に食らいついている少女の姿だつた。

そんな悍ましい光景に僕は思わず小さく悲鳴を上げてしまう。

その声に反応した少女は僕に気付いて振り返つた。

「……あなた、だあれ？」

動転していた僕はその質問にすぐに答えられず固まつてしまふ。

少女は続け様に質問を投げかけて来た。

「……あなたは食べられる人類？」

ゾツとするような質問をしてくる少女は酷く落ち着いていた。

血で汚れた口元は獲物を狩つた狩猟者の証で、幼い少女には似つかわしくなかつた。

僕は声が出せる事を確認して、努めて冷静に少女に答える。

「あ……。た、食べられるかどうかは分からぬが、僕は食べられたくないな」

「ふーん。でも、食べてみなきや分からぬわよね？ 私食わず嫌いはしないのよ」

「それは結構な事だが、食べられる僕として溜まつたもんじやないな。そこの、今食べてた分では足らないのかい？」

「足りないことはないけど、いっぱい食べないと成長出来ないじゃない」

当然のように答えているが少女が食していたのは先程まで僕を狩ろうと追つてきていたグールの死体だ。この奇妙な少女はこんなものを見つけて生きているのかと、普通じやない少女に僕は恐怖と興味が湧いた。

「僕は食べられたくない、しかし君は食べたい。どちらも解決するの
は難しい。だから……」

「だから？」

「僕と一緒に来てくれないか？」

「あなたに着いていけばお腹いっぱいになるの？」

「それよりマシなものは出すと保証するよ」

「うーん……、分かったわ。じゃあ連れてつて

少女からイエスの回答を貰つて安心する。

グールや少女に闇、謎が多い現状、目の前の身の危険を回避するにはこれしか思い浮かばなかつた。

早速少女を連れて、グールの死体を残した森を去つた。